

## ■ミクロ経済学■ 10：独占および寡占

\* 教科書 浦井・吉町 (2012) 第6章 6.1, p.271 ~ p.284.

個人所有に基づく静学的な一般均衡の世界像は今日の経済学理論、いわゆる「市場」と「価格」の理論の骨格を形成するものであり、基本的には「市場」の持つ肯定的な役割を述べたものである。以下取り扱う内容は、主として部分均衡理論の範囲で議論されるものであり、これまで論じて来た「市場」の持つ肯定的な側面に対して、その限界あるいは問題点を補足・提起するものである。

第一は「市場支配力 **market power**」を持つ主体の問題、これは静学的モデルの大前提である「価格受容行動 Price Taking Behavior」の仮定が満たされない場合であり、一般に独占・寡占の問題が、これに当たる。第二は「市場の失敗」あるいは「外部性」と呼ばれるもので、代表的には「公共財」の供給問題ということに帰着する。以上の問題が経済学理論そのものの発展の中では古典的な問題として位置づけられるのに対して、第三の問題は比較的近年のものであり、「情報の非対称性」と呼ばれる状況として分類することができ、いわゆる「情報の経済学」と呼ばれる一連の議論を形成する。(c.f., Kreps 1990, Part IV, Mas-Colell et al. 1995, Part 3, etc.)

【1】[独占] 生産主体が価格を所与とせずに行動してしまう場合の問題は、独占、寡占に代表される(不完全)競争 Imperfect Competition の問題として取り扱われる。独占・寡占とは、単一または少数の企業で一つの商品の供給を行っている状況をさすものであり、その商品の市場において個々の企業の生産量が市場全体の供給量に対して十分大きな比率を持つが故に、自らの供給量を増減させることによって、市場価格を上下させるといったことが可能である(市場(支配)力 **market power** を持つ)と生産主体が自覚しているということが、議論の本質である。

独占企業が自らの供給する財の市場において需要関数  $q = D(p)$  に直面しており、その逆関数(逆需要関数)  $p(q) = D^{-1}(q)$  を用いて自らの生産量  $q$  から市場価格  $p(q)$  を、操作できる(と考えている)としよう。このとき利潤最大化の問題は、総費用関数  $TC(q)$  が与えられているとして、 $p(q)q - TC(q)$  の最大化問題となる(これまでは  $p(q)q - TC(q)$  であった)。各関数の微分可能性を仮定すれば、必要条件は上式を微分して0と置き  $p'(q)q + p(q) = MC(q)$  となる。左辺1項目の符号は通常「負」と考えられる。つまり独占・寡占下の利潤最大化行動は、 $p(q)$  が  $MC(q)$  より大きくなる  $q$  として行われる。—一般に、競争価格に比して、高価格下の少量生産を導く。

★ 独占の Dead-weight Loss:  $\text{Max. } pq - TC(q)$  と  $\text{Max. } p(q)q - TC(q)$  の図による説明. 教科書 p.273

【2】[寡占] 寡占市場におけるゲーム論的均衡: 企業AとBを考え、両企業は市場の逆需要関数  $p(q) = D^{-1}(q)$  を知っているものとし、 $q$  を企業Aの供給量  $q_A$  と企業Bの供給量  $q_B$  の和とする。(互いに相手の産出量を所与とする最適反応となっているような状態がクールノー・ナッシュ複占均衡 教科書 p.274)

企業A ( $q_B$  を所与として最適反応):  $\text{Max. } p(q_A + q_B)q_A - TC^A(q_A)$ .

企業B ( $q_A$  を所与として最適反応):  $\text{Max. } p(q_A + q_B)q_B - TC^B(q_B)$ .

★ シュタッケルベルグ均衡(クールノー・ナッシュと同様の設定の下で、先導者 Leader が追随者 Follower の最適反応関数を知った上で、自らの利潤を最大化する) 教科書 p.276. ベルトラン均衡(各企業の産出する製品に差別化がなされているような状況も踏まえた、価格競争によるナッシュ均衡) 教科書 p.278.